

『更級日記』の夢

—日記の構成と夢とのかかわり—

樊 穎

Dreams in *Sarashina Diary*
– The relationship between the diary’s structure and dreams –

FAN Ying *

Because the word “dream” is often used in the literature of the Heian period in Japan, and because a large number of diary entries on dreams have been found, scholars have been focusing on the “dream” as one of the major themes of these works of literature. Among the memoirs of the Heian period, this work in particular, and its author, Lady Sarashina (also known as Sugawara no Takasue no musume), are perhaps best understood in terms of the “dream” theme. So much so, in fact, that the author of *Sarashina Diary* is described as “a dreaming girl.” In previous research on *Sarashina Diary*, many scholars have commented on the author’s religious consciousness in relation to the “dream.” The current article draws on this research to consider the relationship between *Sarashina Diary*’s structure and dreams.

* 城西大学助教

一

文学と夢とは深いかかわりを持つていることが、古今東西の文学について言えることであろう。日本文学においても、平安時代の作品に、「夢」という語が多く使われており、夢についての記事が多く記載されているため、「夢」は、それらの作品の重要なテーマとして注目されている。平安時代の日記作品の中で、『更級日記』の作者が「夢見がちな少女」と言われるほど、「夢」はこの作品と作者菅原孝標女について理解するには、重要なキーワードになっている。今までの『更級日記』研究では、「夢」について、作者の宗教意識に関連する指摘が多く見られる。本研究は、先行研究をふまえた上で、『更級日記』の構成と夢とのかかわりについて考察していきたい。

二

心理学的には、夢は人間が睡眠中に見る幻覚のことであり、夢は「以前に出会ったことの違い」と、心の中の願望や恐怖などから出来上がるものⁱであるといわれている。つまり、「夢を、その夢を見た人の無意識のあり方を示すものとして受け止めるのである」ⁱⁱ。

もちろん、現代の人の夢に対する意識と理解は、古代の人のそれと違っているのは言うまでもない。

『王朝語辞典』によると、「ゆめ」は『万葉集』では「いぬ」（斎目）であり、同系統の言葉の「忌む」の「い」、「斎つ真椿」の「ゆ」（斎）などあり、神、異郷にかかわることを表わす語である。「夢うつつ」という言葉があるように、夢は、現実世界とは構成原理の異なる「いま一つの世界」であり、「異郷」、「異空間」でもある。古代人には、夢がその「異郷」「異空間」すなわち夢に現れている世界に移動する手段でもあると信じられていた。つまり、夢と「うつつ」を単純に機械的に対立させてはいけない。夢もまた一つの「うつつ」、一つの独自の現実であり、一つの現実として直接的に経験されたと考えられているⁱⁱⁱ。

また、古代人にとっては、夢は、人間が神仏の世界に通じる唯一の手段であり、神仏が、あるいは聖なるものが、その心を人に知らせるために用いるもつとも普通の方法や命令である^{iv}と信じられていた。夢の啓示によって死後の世界を現世の人に知らせ、夢に吉凶禍福を頼ることも多かったのである。当時の人々にとっては、夢は信すべきものであり、夢想によって得た神意は従うべきものであった。夢は、時代の文化や精神の構造にかかわっており、個人の夢が当人の生活史と切り離せない関係にあると考えられているため、当時の人々の

日々の生活や公事を行うに当たつての指針とされている。

夢についての記録は、平安時代の漢文日記や仮名日記にも確認できる。漢文日記に「夢想」という語がよく出てくる。それは、夢の中で神仏の「お告げ」を受け、そして、そのお告げをさす言葉である。平安女流日記の中では、「夢想」という言葉は使われていないが、漢文日記の「夢想」に当たる「夢」の記事が多く書かれている。

夢の内容や夢に対する態度、取った行動などが記され、特に重要な夢やある特別な意味を持つと思われる夢は、日にちなどが明記されることもある。記録の順番も記録者の意図で入れ替わったり、過去の時間に遡ったりすることがある。

島内景二氏は「夢の文学誌——その推進力と破壊力——」の中で、夢と文学とのかかわりについて、次の三点にまとめている。

夢は、第一に、人間がドラマチックなストーリーを展開させるために必要な「装置」II「約束事」なのである。たとえば、夢のお告げによって、人物を登場させたり、新たな展開を見せたりすることがある。

第二に、夢は、人間が心から実現したいと願っている未来に関する望みのことである。作品の主題として位置づけられることも多い。

文学作品の主人公は、「幸福獲得への野望」を抱いて、夢の

実現に向けて旅立つ。途中、無数の「夢のかげら」IIいつわりの夢」に欺かれつつも、最終的に「夢」を実現し、つまり「真実の生き甲斐」を手にする。このように、「夢」は作品の全体を貫く主題であり、重要な文学的素材でもある。

第三に、現実世界になじめず弾き飛ばされた弱い人間の感ずる「迷い」のことであり、取るに足らぬはかない存在のことである。

文学作品の中の夢は、必ずしも特例ではない。その時代の個人の夢を描くことによって、当時の人々の考え方、つまり時代の夢を反映することができる。その反面、社会の主流からはみだしている「周縁的な存在」、社会的弱者の感じた「迷い」なども、個人的なものの範疇を超え、人間の共通したものと取り上げられている。

以上の意味では、夢は文学の素材であり、方法であり、主題でもある。作品全体の構成などに深くかかわっている。

三

以上、夢の概念、古代人の夢に対する意識、夢と文学の関係について述べてきた。次に、以上の内容をふまえて、平安時代の女流日記『更級日記』の「夢」について考えていきたい。

森田兼吉氏が、平安鎌倉時代の代表的な女流日記の中で、「夢」という語の使用数と作中に具体的に書かれている夢の記事の数について表にまとめた。^{vi)}

* 「夢うつつ」「夢路」「夢解き」などの夢を基にする造語も夢という語に含ませている
 * 完全に副詞化した「ゆめ」はかぞえない

作品	作者	描かれている年時	夢という語	実際の夢	
				作者	他人
蜻蛉日記	藤原道綱母	九五四～九七四	二十四	六	四
和泉式部日記	和泉式部	一〇〇三～一〇〇四	八	〇	〇
紫式部日記	紫式部	一〇〇八～一〇一〇	四	〇	〇
更級日記	菅原孝標女	一〇二〇～一〇五九	二十二	九	二
成尋阿闍梨母集	成尋母	一〇六七～一〇七三	十五	三	〇
讚岐典侍日記	藤原長子	一一〇七～一一〇八	三	〇	〇
うたたね	若年の阿仏尼	一二三八?～一二三九?	十三	一	〇
問はず語り	後深草院二条	一二七一～一三〇六	六十六	八	四

その表のデータを参考に簡単にまとめると、「夢」という語の使用数が一番多いのは、鎌倉時代に書かれた『問はず語り』で六十六例ある。実際に見た夢についての記事が全部で十二例あり、そのうち、作者が見た夢が八例、他人が見た夢が四例書かれている。

平安時代の女流日記の中では、和歌に詠まれた「夢」という言葉を含めると、『蜻蛉日記』は「夢」の使用数が最も多く二十四例であり、その次は、『更級日記』で二十二例、『成尋阿闍梨母集』十五例となっている。『蜻蛉日記』の「夢」の使用例が一番多いが、『更級日記』と『成尋阿闍梨母集』が、比

較的に短小な作品であることを考えると、「夢」の使う頻度がかなり高いことがわかる。

『更級日記』の二十二例のうち、和歌に詠まれたのは二例のみである。二例とも「夢さめて」という文句が使われており、「夢」の本来の意味、「睡眠中の幻覚」という意味から、睡眠から目が覚めると理解してよいであろう。ほかの地の文の「夢」の用例は、「夢路」が一例、「夢解き」が一例、「夢の世」が一例である。ほとんどの用例は「夢」の本来の意味が使われており、三例ほど、「夢」の比喩的な意味で「夢のように思われること」、「夢のようにはかないこと」と理解できる。

次に、実際に見た夢についての記事の数をみると、『蜻蛉日記』は、作者の見た夢の記事が六例、他人の見た夢が四例で、あわせて十例である。『更級日記』は、作者の見た夢が九例、他人の見た夢が二例で、あわせて十一例である。『成尋阿闍梨母集』は、作者が見た夢の三例のみである。つまり、実際に見た夢を記録した記事の場合は、『更級日記』の数は『蜻蛉日記』を上回っており、特に作者自身が見た夢の数が九例で、平安鎌倉時代の女流日記の中でもっとも多くなっている。それらの夢の記事が、どんな内容なのか、どのように、どういう順番で書かれたか、作者はそれらの夢に対して、どんな態度を持ち、どんな行動を取ったのかなど、このような問題は、「夢」が大きな割合を占めている『更級日記』において、重要

な意味を持っている。「夢」はこの作品を読みとくには不可欠なキーワードとなっている。

『更級日記』の夢について多くの研究が挙げられる。

今井卓爾氏は、「それぞれの夢の多くは、それぞれの時点の作者の生活に、特に精神生活に深くかかわっていたものであったであろう」。夢告げに対する態度は、「否定、無視から肯定、依存に変貌していることが（中略）読みとることができ^{vii}」としている。

夫の死についての内容の後に、孝標女は自分の一生をふり返って不如意な人生をまとめた。吉岡曠氏は、「自分の一生を失意の連続の一生と考えて、その原因を、若い時代の不信仰と、中年期の信仰の不徹底に帰しているのだが、物語・歌と信仰とが対置され、その信仰は夢と分ちがちがたく結びついているというのが、この人の精神構造である」と述べている^{viii}。

特に、最後の夢——天喜三年（一〇五五）十月十三日、孝標女が見た阿弥陀仏来迎の夢——は、「作者の精神的遍歴の到着点」とし、この日記を統括する根幹となっていることも指摘している^{ix}。

このように、前の十例の夢の記事が、すべて最後の阿弥陀仏来迎の夢の伏線として、この日記全体を支え、「悔恨」という日記の主題を支えているという見解が多く見られる。確かに、今までの夢告げで得た神仏からの啓示を守らなかった自

推定年齢	夢を見た時の状況	夢の内容	作者の態度
① 十四歳	(源氏物語を) 一の巻よりして、人もまじらず几帳の内のうち臥して、引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに、	夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」と言ふと見れど、	人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、
② 十四歳	物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎり、これをのみ心にかけたるに、	夢に見ゆるやう、「このごろ、皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむ造る」と言ふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言ふと見て、	人にも語らず、なにととも思はでやみぬる、

分の「不信仰」を後悔し、阿弥陀仏の来迎の夢を唯一の頼みとしていているという、孝標女が晩年この日記を執筆する時の心境が述べられている。しかし、十一例の夢の記事が孝標女の人生の「それぞれの時点の生活に、特に精神生活に深くかわわっていたもの」であればこそ孝標女がそれぞれの夢を見たときの心情も違うはずである。つまり、孝標女の人生のそれぞれの時期の精神生活の違いを、夢の記事を一つの手掛かり

として検証する必要がある。

四

次に、『更級日記』の十一例の夢の記事を前後の文脈の中において、夢を見たときの状況、夢の内容、孝標女の推定年齢と夢に対する態度(述懐の内容)にわけてまとめた。

推定年齢	夢を見た時の状況	夢の内容	作者の態度
③ 十五歳	(姉の夢) 姉のなやむことあるに、ものさわがしくて、この猫を北面にのみあらせて呼ばねば、かしましく鳴きののしれども、なほさるにてこそはと思ひであるに、わづらふ姉おどろきて、「いづら、猫は。こちらて来」とあるを、「など」と問へば、	「夢に、この猫のかたはらにきて、『おのれは、侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中において、いみじうわびしきこと』と言ひて、いみじう泣くさまは、あてにをかしげなる人と見えて…」	…と語りたまふを聞くに、いみじくあはれなり。…「大納言殿に知らせたてまつらばや」と言ひかくれば、
④ 二十八歳	それにも、例のくせは、まことしかべいことも思ひ申されず。彼岸のほどにて、いみじう騒がしうおそろしきまでおぼえて、うちまどろみ入りたるに、	御帳のかたのいぬふせぎのうちに、青き織物の衣を着て、錦を頭にもかつき、足にもはいたる僧の、別当とおぼしきが寄り来て、「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見ても、	うちおどろきても、「かくなむ見えつる」とも語らず、心にも思ひとどめでまかぬ。
⑤ 二十八歳	(僧の夢) 母、一尺の鏡を鑄させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せたまへ」など言ひて、詣でさするなめり。	この僧帰りて、「…御帳の方より、いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞきたまへるが、奉りし鏡をひきさげて、…『この鏡を、こなたにうつれる影を、見よ。これ見れば、あはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを、見れば、伏しまろび泣き嘆きたる影うつれり。『この影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ』とて、いま片つ方うつれる影を見せたまへば、御簾ども青やかに、几帳押し出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木づたひ鳴きたるを見せて、『これを見るはうれしな』とのたまふとなむ見えし」と語るなり。	いかに見えけるぞとだに耳もとどめず。

推定年齢	夢を見た時の状況	夢の内容	作者の態度
⑥ 三十二歳	ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るはいとかたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかばかしからぬこちに、夢に見るやう、	清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出て来て、「そこは、前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素性まさりて人と生れたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、その造りたりしなり。箔をおしきして亡くなりしぞ。」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」と言へば、「亡くなりししかば、こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、	清水にねむごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし、
⑦ 三十八歳	十一月の二十余日、石山に参る。…暮れかかるほどに詣で着きて、齋屋におりて、御堂にのぼるに、人声もせず、山風おそろしうおぼえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、	「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへ告げよ」と言ふ人あるに、	うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。
⑧ 三十九歳	その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、	いみじくやむごとなく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、	うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、

推定年齢	夢を見た時の状況	夢の内容	作者の態度
⑨ 三十九歳	三日さぶらひて、曉まかでむとて、うちねぶりたる夜さり、	御堂の方より、「すは、稲荷より賜はる験の杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、	うちおどろきたれば、夢なりけり。
⑩ 四十七歳	同じ心に、かやうに言ひかはし、世の中の憂きもつらきもをかきも、かたみに言ひかたらふ人、筑前に下りてのち、月のいみじう明かきに、かやうなりし夜、宮に参りて会ひては、つゆまどろまずながめ明かいしものを、恋しく思ひつつ寝入りにけり。	宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、	うちおどろきたれば、夢なりけり。
⑪ 四十八歳	さすがに命は憂きにも絶えず長らふめれど、後の世も思ふに叶はずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、	居たる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに透きて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色に光り輝やきたまひて、御手、片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方には印を作りたまひたるを、こと人の目には見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくけおそろしければ、簾のもと近くよりも見え見たてまつらねば、仏、「さは、このたびは帰して、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。	この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

① 十四歳の頃に見た夢である。念願の『源氏物語』五十余巻を入手してのち、それを耽読していた孝標女が見た夢である。黄なる衣を着た僧に「法華経五の巻をとく習へ」と諭される。

同じような構成の夢、つまり、物語に没頭すると夢を見るという構成の夢は、②と④もそうである。

② 同じ頃の夢。「このころ、皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむ造る」と言ふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言われた夢を見た。

③ 作者の姉の夢。姉と二人で飼っていた猫が姉の病の時に夢に現れ、自分は侍従大納言（行成）の娘が生まれ変わったのだ。このごろ下衆の中にありていみじうわびしきことと言っていた夢であった。

④ 二十八歳の彼岸のころ、母と共に清水に参籠した時の夜の夢。青き織物の衣を着て錦をつけた別当とおぼしい僧が、「行く先のあはれならむも知らず、さもよしなきことをのみ」という。

この夢を見た時期は前の夢と少し離れている。その間の出来事としては、侍従大納言（行成）の娘の生まれかわりであ

る猫が焼死し、その翌年に、姉は出産で亡くなった。孝標女は残された二人の子供の面倒を見ることになった。その翌年、父孝標は任官のチャンス逃し、一家は落胆した。その後、東山に移転し、霊山寺に参拝に行く際、石井のところ（しづくに濁る）人と和歌を交わした。この東山転居の部分に和歌のやり取りが多く、孝標女のもとに男が通っていた可能性もあると指摘されている。その後、述懐の文があり、自分が人並みに行いをせず、源氏物語の浮舟のような山里に住む物語の女君になりたいと述べている。そして、父孝標が常陸の国司に任せられた際、父親としての複雑な心情を長々と語っていた。その後、あづまより父の手紙が届いた。父との歌のやり取りがあった。

父が不在の時、母は、孝標女が遠いところに物詣でに出かけるのを心配して、近いところの清水寺につれていった。その清水寺に参籠した頃に見た夢である。

⑤ 前掲の夢に続く記事であるため、それほど時間の隔たりがないだろうと思われる。母が一尺の鏡を鑄させ、自分の娘の運命を「夢に見せ給え」と初瀬に僧を代参に立てた時の夢。いみじう気高う清げなる女が臥しまるび泣きたる影と、その一方には、押し出での衣こぼれ梅桜に鶯のなきたるを見せたと僧は見た夢について語る。

⑥ 二十二歳の十二月の夢。孝標女は祐子内親王家に出仕することになった後、清水に参籠した際、別当とおぼしき僧が出て、自分の前生はこの寺の仏師であり、仏を多く造りし功德で人と生まれたのだと教え、丈六の仏は箔を押さなくして歿したのだと語る。

⑦ 三十八歳の十一月石山寺に詣でた夜の夢。「中堂より御香賜わりぬ。とくかしこへ告げよ」と言われた。この夢の記事の前に、述懐の文が綴られている。これからの生活の豊かなることと、子供を思うように育て上げることが願っていた。

⑧ 三十九歳の十月初瀬詣での途中、山辺という所の寺に泊まって見た夢。やんごとなく清らかな女から、「そこは内にこそあらむとすれ、博士の命婦をこそよく語らはめ」と言われる。

⑨ 次の夜、初瀬に着き参籠して三日の夜、御堂の方より「すは稲荷より賜はるしるしの杉よ」と物を投げ出づるといような夢を見た。

⑩ 四十三歳の秋の夢。昔親しかった人が筑前に下ったあと、月の夜に、昔共に宮（祐子内親王）の御所に居た時の様子を夢に見た。この夢の前にも述懐の文があった。現実生活にお

いては、経済的にも精神的にも安定した状態に入り、子供の成長と夫の任官ばかりを思い続けていると書かれている。

⑪ 四十八歳、天喜三年十月十三日の夜の夢。庭に六尺ばかりの金色に輝く阿弥陀仏が立ち給い、「さは、このたびはかへりて、後に迎へ来む」と言われる声を、自分ひとりがか聞こえているという夢を見た。

阿弥陀仏のご来迎の夢は、唯一年月日はつきり書き記されている夢であり、阿弥陀仏の様子や言葉なども具体的に記されていることから、孝標女の心の中で重要な位置を占めていることが分かる。夫の死ぬ三年前の夢であったが、夫の死の後、時間を遡ってその夢を書き記していた。孝標女はその夢でこれまでの人生の総決算をしようと試みているように思われる。

五

『更級日記』の夢の記事の描き方には特徴があり、日記全体における夢の記事の位置や順番、前後の文脈との関連などは、日記の構成に深くかかわっている。

夢①の前の内容に少しふれると、孝標女は、父に伴ってあ

こがれの京の都に戻ったものの、引き続き継母との生別、乳母との死別、字の練習のお手本を書いてくれた侍従大納言（行成）の娘の死を経験し、ふさぎこんでいた。「心もなぐさめむと心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく」と、そんな彼女を心配して、母は少しでも心の慰めになればと思つて、孝標女のために物語を探し与えていた。

娘の心を慰めようと、母がまず思いついた方法は、物語を讀ませて気を紛らわせることであつた。当時、都の貴族たちの女性の間では、物語を讀むことが、心の慰めとして一般的な行為である。孝標女が物語を讀み、それに夢中になることは、決して特別なことでもおかしいことでもない。物語を讀むこと自体も信仰と対立することとは考えられない。

引用一

紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず、たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず、いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と、心のうちに祈る。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず、いとくちをししく思ひ嘆かるるに、

物語を讀みたくて、孝標女は心のうちにずっと「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と祈つていた。そして、親と太秦に参籠した際に、「ことごとなくこのことを申して」、物語を讀ませてほしいということだけ、懇ろにお願いしていた。

仏に熱心にお祈りする場面は、『更級日記』にはほかにもいくつもある。まず、冒頭部分に、

引用二

つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままにそらにいかでおぼえ語らむ、いみじく心もなきまに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、

父の任国上総にいたころ、『源氏物語』などの物語を見たくて、早く京の都に戻りたいという願いを、みずから作った薬師仏に祈り申した。

また、常陸に赴任した父のことを思い、孝標女は、

引用三

八月ばかりに、太秦にこもるに、……七日さぶらふほども、ただあづま路のみ思ひやられて、よしなし事からうじてはなれて、「平らかにあひ見せたまへ」と申すは、仏もあはれと聞き入れさせたまひけむかし。

七日間参籠している間、ただ遠い常陸に赴任した父のことばかり思い、物語のことも忘れてしまった。ただ無事に父と再会したいとばかり願っていた。仏様もきつと私の思いを不憫に思いお聞きいれになるであろう。

夢⑦の記事の前に、述懐の文が綴られている。これからの生活の豊かなることと、子供を思うように育て上げることがを願っていた。

引用四

今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、

引用一と引用二の傍線部で示したように、孝標女が懇ろに仏にお祈りしているのは、まさに信心深いと言ってよいだろ

う。物語を読みたいという希望と神仏への信仰とは対立した両項目であると、単純に判断できないであろう。そして、引用三と引用四で示したように、年齢や環境の変化によって、孝標女は仏に願う内容も変わっていく。夢の記事とその前後の文脈をたどると、孝標女の心境の変化を読み取ることができ、単純に「物語から信仰へ」変わっていったとは言いが切れないであろう。

夢①と②の記事の前に、孝標女が物語を耽読する場面が書かれている。

夢①の場合は、念願の源氏物語が入手できて、「昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのこと」ないほど夢中であった。夢②の場合は、「物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎりは、これをのみ心にかけてる」様子であった。

物語を読みふけると、夢に僧が現われ、忠告あるいは戒めを伝えるという、一見、物語耽読と夢の記事が構成上に対になっているように見える。しかし、この対になっている構造は、孝標女が少女期に見た夢①と②の部分のみであった。夢③の記事の前後に物語を読みふける内容も、夢に僧が現われ忠告することもなかったが、姉が見た猫の転生の夢であるため、最も物語的な要素が含まれている夢の記事であると言え

よう。孝標女の少女期の夢①、②、③は、直接物語に触れたり、物語的な要素が含まれたりしている。

それに対して、夢④からの夢の記事は、夢③の時点からだいぶ時間の隔たりがあり、物語とのかかわりが直接述べられていない。「物語」と「夢」神仏「信仰」との対立関係は、すべての夢の記事について言えない。

『更級日記』の中に、作者の心情を述べる述懐の部分がある七箇所あると指摘されている。夢の記事の前後に述懐の文が入っており、夢の記事と構造上で対になっていることが特徴であるといえよう。同じ夢①を例として説明すると、夢の記事のすぐ後に、孝標女が『源氏物語』の夕顔と浮舟の名を例に挙げ、物語の中の女君に憧れ、将来自分もきっとそのようになるのだと心境を述べたところがある。

引用五

物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まついはかなくあさまし。

同じ構成になっているのは、夢⑦、⑨と⑩である。⑦の夢の後に、人妻としての境遇に即した願望、つまり、経済的な安定、子供の成長、資産の蓄積などという現世的な願いが述べられていた。夢⑨の後に、大嘗会の御禊の日に、初瀬詣でに出て、再度の石山寺と初瀬詣での旅についての述懐が書かれている。夢⑩の後に、「昔より、よしなき物語歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」に総括される。この述懐の中の「物語、歌、信仰」物詣で「現世利益、宮仕え、夢」の五種類が常に作者の意識の根底にあり、この作品を解く鍵となっている。

* 原文の引用は新潮日本古典集成『更級日記』による。

* 本稿は、二〇一一年八月一日～八月五日、中国西安市陝西師範大学文学院にて開催された「中日韓言語・文化研究国際学術共同シンポジウム2011」において、口頭発表した内容をまとめたものである。

【注】

- i 永井義憲 「更級日記と夢ノート」(日本文学研究資料刊行会編『平安朝日記Ⅱ』 有精堂 一九七五年)
- ii 河合隼雄 「『浜松中納言物語』と『更級日記』の夢」(『物語と人間』 岩波書店 二〇〇三年)
- iii 西郷信綱 「古代人と夢」 平凡社 一九七二年
- iv 同 i
- v 島内景二 「夢の文学誌―その推進力と破壊力―」(叢書『想像する平安文学』第五卷 『夢そして欲望』 河添房江ほか編 勉誠出版 二〇〇二年)
- vi 森田兼吉 「夢よりもはかなき―女流日記文学と夢―」(佐藤泰正編『文学における夢』 笠間選書九三 笠間書院 一九七八年)
- vii 今井卓爾 「更級日記 譯注と評論」 早稲田大学出版部 一九八六年
- viii 吉岡曠 「更級日記」解説(新日本古典文学大系二十四『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』 岩波書店 一九八九年)
- ix 家永三郎 「更級日記に見たる古代末期の廻心―日本思想史に於ける彼岸と此岸との問題―」(『上代仏教思想史』 畝傍書房 一九四二年)。近藤一一 「更級日記構想論」(『国語と国文学』 一九五一年五月)

【参考文献】

- 日本文学研究資料刊行会 編 『平安朝日記Ⅱ』 有精堂出版 一九七五年
- 河合隼雄 『物語と人間』 岩波書店 二〇〇三年
- 島内景二 「夢の文学誌―その推進力と破壊力―」(河添房江ほか編 『夢そして欲望』(叢書『想像する平安文学』第五卷) 勉誠出版 二〇〇一年)
- 西郷信綱 『古代人と夢』 平凡社 一九七二年
- 佐藤泰正 編 『文学における夢』 笠間選書九三 笠間書院 一九七八年
- 秋山虔 編 『王朝語辞典』 東京大学出版会 二〇〇〇年三月
- 今井卓爾 「更級日記 譯注と評論」 早稲田大学出版部 一九八六年
- 長谷川政春 今西祐一郎 伊藤博 吉岡曠 編 『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』(新日本古典文学大系二十四) 岩波書店 一九八九年
- 家永三郎 『上代仏教思想史』 畝傍書房 一九四二年